

RX-78

GM

ジム

ジオン公国軍が実戦投入したザクIIに対抗すべく、地球連邦軍が量産に成功した主力MS。

RX-78 ガンダムの機体設計をベースにしつつ、生産性や整備性を考慮して再設計。
コア・ブロック・システムをはじめとした特殊機構を外すなど、徹底した簡略化を行うと同時に武装自体も簡略化した。

そして前期型と呼ばれる一時生産機を経て、一年戦争後期に後期型(実戦タイプ)が配備されるに至った。
能力的にはガンダムに劣るとはいえ、柔軟な設計を採用したことから各種バリエーション機の誕生を促している。



スペック

| | |
|-----------|---|
| 全 高 | 18.0m |
| 本 体 重 量 | 41.2t |
| 全 機 重 量 | 58.8t |
| 装 甲 材 質 | チタニウム合金 |
| メインレター・出力 | 1,250kW |
| スラスター 推力 | 51,740kg |
| センサー有効半径 | 6,000m |
| 武 装 | ビーム・スプレーガン×1 60mmバズルガン×2 ビーム・サーベル×1 シールド×1 他 |
| パイロット | 地球連邦軍一般兵 |

GUNDAM MS Bible 25

CONTENTS

| | | | |
|--------------------------|----------|---|----------------|
| ■ 戦場レポート 宇宙要塞、攻防戦 | 01 | ■ MS進化論 ジム 開発系譜図 | 16 |
| ■ MS機体解析 機体解説 武装解説 | 05 10 | ■ メカニック・ジャーナル モノコック構造 V作戦 ルナツー | 24 26 32 |
| ■ 関連MSラインナップ ジムと関連機体 | 12 | ■ ガンプラ ジェネレーション 連邦軍主力MSとその系列機を振り返る! | 34 |
| ■ MS戦記 ジム 戦時の記録 | 14 | | |







『機動戦士ガンダムIII めぐりあい宇宙編』より

宇宙要塞、攻略戦

運用MS 地球連邦軍

ソロモン攻略戦に参加したのはティターンズおよびワッケイン艦隊（さらに第十三独立部隊も参戦）。ワッケイン艦隊が正面から攻勢を仕掛けて公国軍の注意を引き付ける一方、ティターンズ艦隊はソーラ・システムの攻撃を担当した。



MAGELLAN
マゼラン戦艦

SALAMIS
サラミス戦艦



RX-77
GUNCANNON
ガンキャノン

RX-78-2
GUNDAM
ガンダム



RGM-79 GM
ジム

ザクに対抗すべく、連邦軍が開発した主力汎用MS。開発時期によって型状や能力が異なる。



WHITE BASE
ホワイトベース



PUBLIC
パブリック



GORE BOOSTER
コア・ブースター



RG-79 BALL
ボール

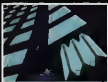


U.C.0079.12.24、地球連邦軍提督ティラムに率いられた艦隊がジオン公国軍宇宙要塞ソロモンを攻撃した。「星一号作戦」の前哨戦ともいべきソロモン攻略戦(コードネーム:チェンパロ作戦)の開戦である。この作戦までにMSの有用性を認識し、生産体制と運用理論を確立させた連邦軍は、主力量産MSとなるジムと支援兵器であるボールを本格的に実戦投入。新兵器ソーラ・システムによる援護もあり、ソロモン陥落は容易であると思われた。だが公国軍は、最後にして最大の一手となる切り札を隠し持っていたのだ。

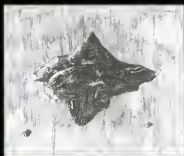
戦闘宙域

戦場となったソロモンは、ルナツーと同様、資源探鉱用として小惑星帯から運搬されてきた岩塊である。しかし一戦戦争開始後に公国軍が軍事施設として改築を開始。U.C.0079.05.17、宇宙軍第ソロモンとして完成した。以後、公国軍宇宙攻撃軍司令部ズル・ザビが司令部を構え、月面都市グラナダと宇宙軍軍ア・バオア・ワーを結ぶ公国本道(サイド3)の絶対防衛ラインの一角となった。ただし陥落後は連邦軍に接収、「コンペイトウ」と名を改められている。

ソロモン攻撃時に連邦軍が投入した新兵器ソーラ・システム。400万枚のミラーを駆使し、太陽光を反射・集中させるという代わりである。



原理自体は極めて単純だが効果は大。量産兵器の第6ゲートを一帯で破壊したことから、真点をいらしながら撃射することで多大な被害を与えた。



■宇宙軍第ソロモン全貌



MA-06 BIG-ZAM
ビッグザム

公国軍が試作した大型MA。高出力メガ粒子銃とフィールド・ジェネレーターを搭載する。

MS-06F
ザクIIF 機

MS-08R RICK-DOM
リック・ドム

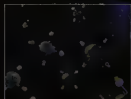
GATTLE
ガトル

MUSA1
ムサイ機動歩隊

CHIBE
チベ機動歩隊

運用MS ジオン公国軍

厚い岩盤に覆われ、艦攻不降を誇っていたソロモンだが、ソーラ・システムの攻撃で深刻な被害を受けてしまう。さらに防衛線の破れ目から連邦軍MSが要塞内に侵入。最終的に、ドズルに重宝の放棄を決定させることになった。



機動ミサイル

HISTORY TIMELINE — 物語の展開 —

■巨大機動兵器による蹂躞

ソロモン放棄を宣言しドズルは残存兵の撤退を命じる一方、自らは大型MAビッグザムに搭乗。連邦軍艦隊に単機での攻撃を仕掛けた。機動兵器としては初めてフィールド・ジェネレーターを搭載したビッグザムは連邦軍艦隊の攻撃を無効化。サブミス級やマゼラン級など、多数の艦艇を撃沈した。

ソロモンから撤退する友軍艦隊の機動兵器を食として出現したビッグザム。その巨体と異様な外見に、連邦軍兵は恐れをなしたとされる。



巨漢、接近時にはほとんど対射できず。コア・ファイターの機体だけに加えて、ガンダムの精密機によって撃破されている。

機体周囲に28万ものメガ粒子弾を駆使。一帯で複数の連邦軍艦艇を撃沈せしめた。さらに大型メガ粒子弾も駆使する。



MS 機体解析



RGM-79 GM

ジム

ガンダムの設計を基に 量産化に成功した 地球連邦軍の主力量産MS

RGM-79 ジムは、地球連邦軍が一年戦争において初めて量産に成功したMSである。RX-78 ガンダムの基本設計を簡略化して大量生産を可能とした本機は、戦争末期の反攻を支える重要な戦力となった。一方で、反攻作戦に間に合わせるために生産期間の短縮と低コスト化を進めた結果、「粗悪品」と評されるほどの低水準な代物となってしまった。それらの機体は先行量産型（先行量産機、前期生産型とも）と呼ばれ、さらに前期型と後期型に細かく分類される。また、生産数はジャブローで生産された前期型（第1次生産機）が42機、ジャブローやキャリフォルニア・ベースなど6ヶ所の拠点で生産された後期型（実戦タイプ）が288機とも言われている。性能面に問題を抱えてはいたが、地球連邦軍初の主力量産MSとしての意義はきわめて大きかった。



一年戦争期の地球連邦軍主力量産MSとして大量に配備され、その数値をもって戦争を勝利に導く戦力となった。



優れた基本設計に基づくMSでもりながら、余裕のない生産体制ゆえにその性能を削られてきた。簡略される結果となった。



RGM-79 GM
Front view

■機体比較



RX-78-2
GUNDAM
18.0m



RGM-79
GM
16.0m



MS-06F
ZAKU II
17.5m

基本設計を同じくしていることから、細部の形状こそ異なるがフォルムはガンダムに似通っており、機体サイズも変わりない。カラーリングも象と違がかった白の正色を基調とするシンプルなものとなっている。



同スケール
パイロットとの対比

MS 機体解析 機体解説

ガンダムから受け継いだ優れた基本設計と 先行量産型が発揮できなかった本来の性能

先行量産型で満足な性能を得られなかったジムだが、フレーム強度や出力に余裕がある設計だったことから、局地戦仕様への派生も容易であった。事実、基本設計に忠実に生産された後期生産型のなかには、ガンダムに迫る性能を発揮する機体もあったとされる。ただし、後期生産型は戦争末期に少数が配備されたのみで、主力はあくまで先行量産型であった。コア・ブロック・システムや教育用コンピューターなどの高コストの機構を廃したことで得られた生産性は、地球連邦軍の物量戦術を支えたのだった。

■頭部

頭部はガンダムからの簡略化が端的に表れた部位で、シンブルな形状とバイザーで覆われた光学端末を特徴とする。モニタセンサーのような光学端末はガンダムと同じデュアル方式を簡略化したもので、各種デバイスやセンサー類は機能を維持したまま小型・高集中度化されていた。また、コア・ブロック・システムとしての機能やモニタリング装置は、データ収集の役割がなくなったため簡略化されている。



頭部の位置はRX-77ガンキャノンにも近い。簡略と機能の簡略化は生産工程の簡便につながっていた。

ガンダムと同じく頭部にメイン・カメラを配している。下は機体のルナツー所屬機だが、構造は変わらない。



■胴体 ランドセル

胴体は換装機能を有するブロック構造を採用し、ガンダムにあった腰部外装ユニットが省略されている。また、RXシリーズMSの可変式コア・ブロック・システムは廃され、操縦艙内に固定した非変形のコア・ブロックを採用している。背部のランドセルは基本的にガンダムのものと同じ構造で、コストダウンのためにビーム・サーベルのラッチが1基に減らされているが、異なる仕様も存在した。



機体から視座にかけての形状はガンダムとほぼ同じだが、コア・ブロックの両側が一枚板構造に変更されている。



両側材にはコストを考慮してチタン系合金が採用されていたが、RXシリーズMSのルナ・タニウム合金に比べて耐衝撃性に劣っている。



ランドセルには2基のメイン・スラスターを備える。スベック・データ上の推力はガンダムと推定されていた。



手前のビーム・サーベルを解説した「日本版」と呼ばれる仕様は主に前線機に見られる。



サーベル・ラッチの位置にハイパー・バズーカ用マウント・ラッチを設けた仕様も存在する。

■胸部 脚部

胸部はガンダムと同等のユニットが使用されていたと書われ、形状も同じである。脚部も基本的にはガンダムの設計を引き継いでいるが、膝部装甲の構造が異なる。また、四肢を含めた機体全体の駆動方式には、RXシリーズMSと同じフルール・モーターを採用していた。なお、胸部と脚部にも設計の簡略化は施されていたと見られる。



角張った形状の関節はガンダムと共通している。前線機にはシールド用のマウント・ラッチが設けられていた。



機体は簡略化されている点を鑑みてガンダムと同じ構造で、あらゆる状況に対応可能な設計がなされていた。



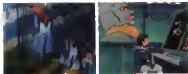
ビーム・スプレーガンと備えるジム。生産コストを抑えるために機体構造や武器を簡略化しているが、その分を生産台数で補填。戦場では、数による優位を確立した。



RX-77 GUN
Rear view

■ジムとガンダムの関係と両者の比較

ジムの機体名称「GM」の由来は諸説あるが、そのひとつに「Gundam Model(ガンダム型)」の略とする説がある。本来は量産を前提としながらも機体単価や生産期間の問題からそれに至らなかったガンダムの代替として、本機の開発が進められた経緯を補強するものと言える。密接に関わりあうジムとガンダムは、主力量産MSの雛型とフラッグシップ機の代名詞として、それぞれ異なる方向に分岐して発展していくことになる。



ガンダム型と先行機で進められた実験データは機体部等によって吸収され、ジムの開発と改良に生かされている。

■ジムから見たガンダム

ジムから見たガンダムは「実験機的な試作MS」と捉えることができる。先進技術を使用されているが、それが高コスト化を招いていることも否定できない。それはハイエント機ゆきのことであり、ガンダムがそれに位置づけられる理由でもある。

コクピットブロック

ガンダムが採用したコア・ブロックシステムは、生存性とデータ収集能力を向上させた。しかし、高コスト化と機体構造の複雑化を招いた。ジムでは好意的なコクピットブロックを採用、装甲材も重要することで生産性の向上と高コスト化を達成した。

武装

ジムは陸基型のヒーム・ライフルといえるヒーム・スプレーガンを生兵器とした。ビーム・サーベルやハイパー・バスターはガンダムと同じであった。

■ガンダムから見たジム

ガンダムとジムの比較した場合、ジムは機体各部の徹底した標準化が図られた機体といえる。開発時期による性能差もあったが、装置の互換性を持つなど、下位互換機としては必要な機能は備えていた。

頭部

ジムではガンダムのような複雑な形状の頭部は採用していない。各種トランスの小型化に成功したこともあり、デュアルセンサーなどはガンダムと同等の機能を持っているとされる。

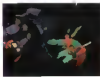
腕部・脚部

ガンダムとジムのほぼ同様のマニピュレーターを採用している。一部関節は簡略化されていたとされるが、武装の互換性など、必要機能は揃っていた。



■ジムの性能傾向

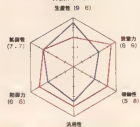
ジムの開発コンセプトは、万能的自衛戦闘MSであるガンダムを範としつつ、余分な装飾を除いて標準的な仕様を目指すというものであったと言われる。そのため、特化した性能を持たない代わりに目立った欠点もないMSとなっており、(先行量産型の低性能は別として)その設計思想を受け継いだ後年の派生機は「特徴がないのが特徴」と評された。



先行量産型の機体では、ジオン公団の主力機と比較しても性能面での優位性は薄く、戦いを任せる場面も少なかった。

ジム ガンダムの機体性能比較

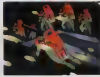
— RGM-79 ジム — RX-78 ガンダム



MORE INFO

一年戦争におけるジムの運用

U.C.0079.10にMSの本格的な量産を開始し、ジムの大量生産でMS戦力を整備した地球連邦軍だったが、その運用体制は万全ではなかった。当時の地球連邦軍には十分な数のMS運用母艦が存在せず、既存の戦艦艦艇に露天係留する程度の運用環境しか整備できなかったためである。さらに、当初ジムとの連携を想定していた中距離支援用MSの量産も遅れ、RGM-79 ボールで数を補った。



マゼラン星宇宙戦艦の甲板上から飛出するジム。当機の地球連邦軍艦艇は、MSを戦場まで運搬する定着しなかった。



ア・バオア・クー攻防戦で見られたザクⅢス陸軍連隊への機動隊、甲板上にMSをワイヤーで固定している。



RGM-80 ジム・キャノンの量産が間に合わず、その代替としてRGM-80 (モビルボット) のボールが選んだ。

MS 機体解析 機体解説

地球連邦軍の主力兵器として配備され、さまざまな戦場で運用されたジムとその戦果

根拠製造とも言える性能な大量生産によって実戦配備が進められたジムの先行量産機は、初期のMS部隊編制に大きな役割を果たした。その性能の評価はさておき、地球連邦軍がMSを主力兵器として運用するに至った事実にはジオン公団軍にも衝撃を与えたのである(地上では本機に先行してMSの実戦運用が行われていたが、配備数は限定的だった)。それら先行量産型のジムは、主にチュンパロ作戦から第一号作戦へと続くU.C.0079.12月の大反乱作戦に投入されたが、それ以外の戦場でも運用が確認されている。以下に触れる機体はそうした運用例の一部である。

RGM-79 ジム (ルナツー所属機)

宇宙における地球連邦軍最大の拠点であるルナツー基地でも、ジムの生産と配備は行われていた。U.C.0078.11.09には、オデッサから地球軌道に脱出したジオン公団軍部隊に対し、ルナツーから連邦部隊が派遣されたが、そのなかにもジム2個小隊(計6機)が含まれていた。それらは射出部隊の救助にあつたジオン公団軍第603技術試験隊と遭遇し、EMS-10 ヴァグとの交戦に及んだ。だが、ジャン・リック・デュバル少佐が操縦するヴダに開戦され、全滅の憂目に遭っている。



戦場最前線でオデッサから打ち上げられ、地上部隊と遭遇したが、ジムの機動性に圧倒されて全滅した。



機動性や機動性(「工場」)によって仕様が異なるのがジムの特徴であり、正面からアゴライズを測っている状態。機動性上に基づいた機体だけでなく、何層も改良を加えられた機体もある。

RGM-79[E] 初階型ジム

「先行量産型ジム(宇宙戦艦版)」とも呼ばれるこの機体は、ルナツー工廠で生産されていたとされる宇宙戦艦仕様のジムシリーズで、ジムの先行量産型(RGM-79)に先駆けて完成していたという。形状は一年戦争末期に実戦投入されたRGM-79C 後期型ジム(同じ型式番号を持つジム改にも近い)に似ているが詳細は不明で、RGM-79[G] 階層型ジムと同時期に開発されたとも言われる。U.C.0079.10には、試験用MSを運用するジオン公団軍部隊との交戦例が確認されている。



コジマ大尉に転属する前のテラー・サンダース大尉、が乗った。両機は機動性をスコアを稼いだとされる。



ビーム・サーベルを装備した機体は小隊単位で考えられることが多かった。それだけに生産台数は少なく、珍しいタイプと見える。





RGM-79 ジム (ジャック・ザ・ハロウィン隊仕様)

ジャック・ザ・ハロウィン隊はコンバットウ監督軍・第24戦術部隊の通称で、先行量産型のジムが配備されたMS部隊だった。だが、フジ通輸送艇スルガの襲撃任務中、星一号作戦（ア・バオア・クー攻防戦）に巻き込まれ、民間人を乗せたランチを作った戦場からの脱出を図ることになった。下の2機はその際にジャック・ベアード少尉（下）とアダム・スターングレイ曹長（上）が搭乗した機体で、一般の仕様とは異なるランドセルと肩部にマーキングされた部隊章が特徴となっている。



2機は通い込んだア・バオア・クーの内部で小隊のソーラ・レイを拘束し、アダム機が破壊したと伝えられる。



2機は通い込んだア・バオア・クーの内部で小隊のソーラ・レイを拘束し、アダム機が破壊したと伝えられる。

RGM-79 ジム (ホワイト・ディンゴ隊仕様)

豪州方面軍がMS小隊単位で編制した特務遊撃隊は、配備されたMSへ現地での運用に即した改修を施して運用している。そのなかでもよく知られるのが、専用のカラーリングが施されたホワイト・ディンゴ隊の運用機である。同部隊には汎用MSであるジム（先行量産型）も配備されていたが、機載を想定して陸戦型ジムから装備を流用しており、より実戦的な仕様となっていた。オーストラリアにおける反攻作戦では、戦線維持のために困難な任務に投入され、多くの戦果を挙げている。



ホワイト・ディンゴ隊では先行量産型のジムだけでなく、RGM-79SP ジム・スナイパーⅢなども運用された。

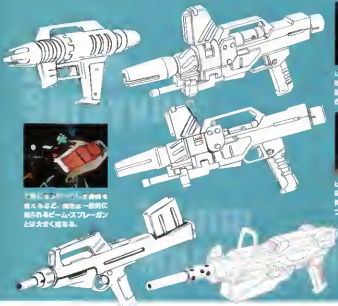


MS 機体解析 武装解説

ガンダムの兵装構成を参考にしつつ、生産性を重視した他機種との兵装の共用

設計の簡略化によってコストダウンを図るジムのコンセプトは兵装についても同様で、加えて他機種と兵装を共用することで生産性の向上に努めている。ガンダムが携行兵装を主体とする白兵戦用MSだったことも、その設計思想の下地となっており、本機は可能な限りガンダムの兵

装を流用しつつ生産・運用が容易なものを積極的に採り入れている。また、本機の機体各部には兵装の携行を助けるマウント・ラッチが設けられている。ただし、これは標準装備ではなく、運用目的に応じて付加されたものと言われている。



機体に固定された光束兵器も見えるが、機体は一般的に用いられるビーム・スプレーガンとは大きく異なる。



ビーム・ライフルはすべて専用で製作されている。ただし、射撃の構造から共通性を認められるケースも多々ある。



ビーム・ライフル（A-8、A-9、A-10）を装備した機体も多かったが、生産が難しいため多くはなかった。



90mmマシニングガンは射出した弾丸が高速で回転する構造となっており、90mmマシンガンを生産機としていた。

■ビーム・スプレーガン

ビーム・スプレーガンはジムの主兵装として開発されたビーム系携行火器（型式番号は「BOWA BR-M79C-1」と「A E-8r G-Sc」で、後者はコピー品）。出力は1MWで、装弾数は1チャージにつき16発とされる。ビーム・ライフルに比べて低コストだが、収束率が低く射程は短い（出力と収束率は意図的にセーブされていたとも言われる）。一方で、連射性はビーム・ライフルよりも向上しているため接近戦での取り回しはよく、近一・中距離等の戦況を本機が担当し、遠距離からの支援をホールが担うという運用が試みられた。また、多くの機体には本兵装用のラッチが設けられ、マウント時にエネルギーの充満が可能で機体一部には存在したとされる（充満には長い時間を見た）。なお、一年戦争末期には構造が異なるビーム・スプレーガンも開発され、後継型として装備されている。これらの詳細なスペックは不明だが、ア・バオ・アーク攻防戦に投入された機体の一部に本兵装の運用が確認されている。



ビーム・ライフルに火力や射程で大きく劣るが、生産性の高さによって主力兵器としての役割を果した。ハイムローミックス機型に電撃ボールとの組み合わせにおいても、その取り回しやすさが有利に働くケースがあったという。



後継型ジムに採用されたビーム・スプレーガン（ビーム・ガンとする説もある）は標準機での運用が確認されていない。聖域防衛ではMP-Q2A オググの頭部を撃つと共通し、MSに致命打を与えるほどの威力を有していた。

■90mm マシニングガン

ビーム・スプレーガンと併用された実弾弾系統携行火器。ジムの運用においては、90mmマシンガン（型式番号は「HWF GMG MG79-90mm」とも）を装備するケースが見られた。これは、ビーム・ライフルの配備が難しいケースでの代替兵装だったと言われる。また、地上で運用された機体のなかには、100mmマシンガン（型式番号は「YH1 YF-MG100」と「NF-GMG-Type.37/100mm」の改修型）を用いた例もある。



90mmマシンガンは射出した弾丸が高速で回転する構造となっており、90mmマシンガンを生産機としていた。



対MS用火器として十分な威力を有し、ア・バオ・アーク攻防戦などでも本兵装による撃破が確認されている。

高機動兵器はガンダムの側面武器と異なり、後部の形状がやや異なる。側面武器が写真なモデルとも考えられる。



Beam Staffは機体で使用するビーム・サーベルはガンダムにも使用された。互はそのサーベル・デバイス。



Beam Staffは機体で使用するビーム・サーベルはガンダムにも使用された。互はそのサーベル・デバイス。



リック・ザ・バロウィーのアダム鋼は、ジャックから奪ったバズーカを用いてリコーレを破壊した。



アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。



アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

アサギの機体でマウントすることが可能。当時との同時期に外れるケースもあった。

■ハイパー・バズーカ

MS用機銃反動砲で、その構造モデルたつたとされる(型式番号は「BLASH HB-L-03/N-STD」)。口径は380mmで、装弾数5発と書かれる(異説では口径270mmまたは75mm、装弾数4発)。MS小隊の編制に組み込まれて中距離支援を担うはずのジム・キャノンの生産が遅れたため、代替の支援火銃として通常のジムに装備された。ア・バオア・クー攻防戦での運用が確認されている。



ジムが装備する兵器のなかではもっとも威力と射撃に重なり、防衛攻撃に用いられるケースもよく見られた。



ジム小隊で1部小隊を編成する面、そのうちの1部がハイパー・バズーカを装備することが多かった。

■ビーム・サーベル・頭部バルカン砲

近接戦闘用のビーム系兵器であるビーム・サーベル(型式番号は「VCU-505EX-V B/Ver021」)は、ガンダムのもので同様の性能を有する。出力は0.3MWとされ、標準的な仕様では装弾数が1基に減らされている(2基装備した機も存在する)。これは防衛性向上に伴う変更もしくはコスト削減のためとも言われている。また、頭部には口径60mmのバルカン砲2基を内蔵しており、装弾数は50発とする説がある。



ビーム・サーベルでMS-09R リック・ドムを攻撃するジム。MSを一撃で両腕を破壊する威力を得ている。



頭部バルカン砲はジムに搭載された唯一の固定兵器で、戦闘中に高い威力を誇るケースがほとんどだった。

■シールド

防衛装備として採用されたシールド(型式番号「RX-94-VT/S-008」)も、ガンダムのもので採用されている。運用データを反映してマウント・ラッチやスライド・ハンドルなどが改善されており、防衛姿勢のフレキシビリティが向上していたと言われる。また、ホワイト・ディンゴ隊の所属機のように、機体型ジムと同型のシールド(ショート・シールド)を装備した機体も存在している。



開発したカトル・ラングはシールドで防衛する。ガンダムのもので同様で、耐久性に優れていた。



シールドはランダムにマウントすることも可能だった。修理率をマージンした高機動機に多い。

関連MS ラインナップ



RGM-79

GM ジム

地球連邦軍
主力機の
設計母体と
なったMS



ジムの
登場以前に
配備された
陸戦機



開発初期
段階で
試作された
先行量産機



■RX-78-2 ガンダム

一年戦争中に地球連邦軍が戦戦投入したRXシリーズのうち、数MSとの近衛格闘を主眼とした機体。当初は量産化を視野に入れていたが、新規技術を導入したことから開発コストが高騰。やむなく本機の基礎設計や戦術データを継承した無差別機MS(すなわちジム)の開発計画が実行されることになった。その一方で、本機の機体性の高さを継承した数機種の開発も行われ、それらはガンダムタイプMSと呼ばれる。

■RGM-79(G) 陸戦型ジム

地球連邦軍における最初期のMSのひとつ。RX-78ガンダムの実戦データが蓄積される前に開発されており、ロールアウトはジムよりも先行。さらに生産ラインをRX-79(G)と共有しており、事実上、ジムとは異なる機体である。ただし機体を構成するパーツの約2割をジムと共用するとの記録もあり、完全に別の機体とは言い切れない。なかでも頭部形状がジムと類似しているのはジムの設計が流用した結果である。

■RGM-79(E) 初期型ジム

一年戦争時のジムタイプには開発時期や開発場所によって複数のバリエーションが存在するが、初期型ジム(先行無差別型ジム)と呼ばれる機体もそのひとつ。連邦軍小惑星基地ルナツーの兵器工廠で開発された本機はルナツーの生産ラインを試験的に運用したもので、いわゆるジムとは別系統の機体である。そのため詳細は不明だが、のちのRGM-79Cジム改の原型となったとの記録が存在している。



機体性能に加え「一年戦争終結のニュータイプ」と謳われたアムロ・レイが駆使したことで、ガンダムの名は神話化された。



本機が主に配備された東南アジア戦線では戦線が荒れがちであり、本機の開発を前年の機体で開発したコンバト機も登場した。



初期型ジムもほとんど開発されておらず、公開資料は戦術資料と交差したとの記録が唯一の公式データとなっている。

機体性能と戦術
両面からオーソ
ドックスだが、3か
月半の開発期間
を要して驚くべき
戦術を達成。その
名を不朽のものとし
た。



機体そのものは
戦術面では驚異
的だが、リニア・
シールドを他機
にないことで戦術
コストが削減。そ
のため本格的な機
体は開発された。



ランバセルやリア
スカーの量に
スラスターを換
装する一方、ビー
ムサーベルのバ
ルンが搭載され
ていないのが外見
の特徴である。



実戦に足る
 能力を
 獲得した
 第二期生産型

初期型、前歯生型を経て、当初、後発種が予定していた性能の realization に成功したのは後期型型式である。機体ごとの性能差が著しかった前期生型型式に対して、後期生型型式は安定した性能を確保、あわせて生産性も確立されたことから物量作戦の中心として戦線にできるようになった。ただし外見上の差異はさほどなく、メウカメラや機銃ダクトの形状程度。さらに顔にはロードアンテナが追加され、進捗行動が容易になった。

一年戦争の
立役者を
蘇らせた
近代改修機

U.C.0080年10月に可決された「地球連邦軍再建計画」に基づき、U.C.0083から開始された機体。一年戦争直撃した連邦軍の窮乏を背景に出来たうえでの機体設計だったが、当時の連邦軍の財政が厳しかったことから航続設計ではなく、旧来のジムのマイナーチェンジ版に留まったとの事情がある。とはいえジェネレーターやセンサ系は最新技術に換装。さらにコグピットには全天候用モニターが導入された。

大量に
生産された
対国軍の
主力駆逐機

ジムの開発に先行するU.C.0077に先行量産型がロールアウトして以来、公認車の主力駆逐MSとしての地位を確立した機体。汎用性を兼ねた民生生産機は4,000機になるとの記録があり、MSの名前機と言っても過言ではない(ジムは3,600機)。そのため一年戦争後も修理と改修を繰り返して長く運用された。現役を引退した機体も廃棄されるだけでなく、戦争博物館の展示品として一般公開されている。



ジムの出現によって変化した戦況

地球連邦軍が開発したジムとその系列機は各地の戦線に配備され、連邦軍の反攻の旗印として活躍。最終的に一年戦争を勝利へと導いた。

戦場の舞台となった地域

01 軌道軌道



02 サイド6



03 ソロモン



04 ア・バオ・ア・ク

オデッサ

地中海沿岸に位置する鉱山都市エリア。地下資源に恵まれており、公国軍の戦線維持に欠かせない場所である。

東南アジア地区

連邦軍本部ジャブローを直接攻撃するMAの建造基地が置かれ、この機体を運送する重要な防衛が行われた。

ソロモン

サイド1領域に位置する宇宙要塞。公国軍宇宙攻撃軍司令部・ザビが駐留し、周辺の制空権を確保する要となっていた。

サイド6

一年戦争初戦終了後、中立を宣言したコロニー群。連邦軍との密約によって、研究施設を模した軍事施設が置かれた。

ア・バオ・ア・ク

公国軍が誇る宇宙要塞。一年戦争における最後の戦場となった。戦後はジオン共和国が管理したが、グリプス戦役の最中、ティターンズに奪取された。

01

軌道上での遭遇戦

U.C.0079.10.06、地球連邦軍東方面軍機械化連成大隊への配備が決定したシロー・アマダは、地球降下直前、ジオン公国軍MS(宇宙用高機動試験機ザク)と交戦する連邦軍MS小隊と遭遇。次々と撃破される友軍を支援すべく、先行生産型ザクで参戦した。この戦場でシローが指揮したのは初期型ジムで構成された小隊。シローのおかげで全滅こそ免れたものの、壊るうて生産できたのはテラー・サンダースの機体だけだった。



試験機だが機動性に勝る公国軍MSの前に苦戦を強いられる初期型ジム。とはいえこの時の戦闘でシローは防衛隊生としての活躍の機会に反映されたと思われる。

高機動試験機ザク

02

オデッサの戦い

一年戦争初期になると連邦軍もMS開発を本格化。なかでも陸戦型ガンダムの生産ラインを利用した陸戦型ジムは少数ながらも量産に成功。各戦線に投入されることになった。なかでも有名なのはU.C.0079.11.07に実施されたオデッサの鉱山地区での戦いである。鉱山地区周辺に何重もの防衛ラインを展開する公国軍に対し、連邦軍は地上戦艦と戦艦車両、さらにMS部隊で編成された機械化部隊を投入。激戦の末、鉱山基地から公国軍を一掃した。



MSの量産に成功した連邦軍だったが、運用や戦術の習得は不十分。戦艦を利用した落とし穴に機体ははまるなど苦戦を強いられた。

ザクII型他

03

アジア地区での取崩

オデッサ陥落によって地上における逆攻め計画は公国軍から連邦軍有利に逆転。各地で残党掃討作戦が実施された。そんな折、アジア地区のラサ基地に立てこもるギン・アサハラン率いる公国軍部隊が連邦軍本部ジャブローへの直接攻撃を可能とするMAアバサスを作成。報告を受けたゴジマ大將がラサ基地進攻を開始した。この戦いには陸戦型ガンダムや機械化ジムが大量に投入されたが、その多くがアバサスの犠牲になっている。



偉大な山の下に基地を建設した公国軍を攻め取る連邦軍MS部隊が突入を敢行したものの、裏に潜んで襲撃されている。

ザクI型他

戦況の経緯

人類はじめて体験した本格的な宇宙戦争として知られる一年戦争はU.C.0079.01.03に勃発した。この日、地球連邦政府からの独立を宣言したジオン公国が、宣戦布告と同時に電撃的な奇襲作戦を敢行。サイド1、2、4にNBC兵器を無差別投入して住民を虐殺。さらにサイド208バッチ・コロニー「アイランド・イフィッシュ」を地球に落下させた。公国軍としては戦況で連邦軍に壊滅的な損害を与え、有利な条件での講和条約を締結する目標も叶ったようだった。しかし逆に連邦軍は徹底抗戦を表明。その結果、およそ1年にわたる戦乱が終り、戦後地球と宇宙の間に消し去ることのできない遺恨となった。

U.C.0079

- 1月3日 一年戦争、勃発。ジオン公国、地球連邦政府に対して独立を宣言。宣戦布告と同時にサイド1、2、4に奇襲攻撃。
- 1月4日 サイド2の8バッチ・コロニー「アイランド・イフィッシュ」、オーストラリア東海岸に落下。
- 1月15日 ルウム戦役、勃発。
- 連邦軍第一連合艦隊旗艦、撃沈。艦隊総司令レベリ、公国軍MS小隊「黒い三連星」によって捕虜になる。
- 1月26日 公国、サイド6を通して連邦政府に休戦条約締結の申し入れを行う。
- 1月31日 南極条約、締結。レベリ、奇跡の生還。

- 2月7日 公国軍、地球降下作戦、開始。
- 3月1日 公国軍、オデッサ地区の連邦軍鉱山基地を占領。
- 公国軍、地上の3分の2を勢力下に置くが、戦線維持に努力を取られて戦局は膠着状態に。
- 4月1日 連邦軍、V作戦、ピンソン計画、発動。
- 7月 RX-78ガンダム試作1号機、ロールアウト。この完成をもってRX-79計画、発動。先行生産、開始。
- 8月 連邦軍、試作型MSの最終テストをサイド7で実施。
- 9月18日 ホワイトベース、サイド7に移動。コロニー内で史上初のMS戦が発生する。

中立地帯での戦闘

U.C.0079.12.09、新型ガンダム(NT-1アレックス)の輸送計画を入手した公国軍は、特務部隊サイクロプス隊に連邦軍基地の襲撃を指示。海中からの奇襲により、ジム軍基地仕様で構成された連邦軍基地を破壊させたものの、目標物の打ち上げ阻止に失敗してしまっ。しかし後日、目標物がサイド8のスペース・コロニー「リボー」に搬入されたとの情報を入手したことから計画は続行。サイド6は連邦軍と公国軍のどちらにも与さない非武装中立地帯であることを宣言していたが、一計を案じたサイクロプス隊はコロニーへの侵入を開始。友軍部隊はコロニー周辺で運動戦戦術を行って、戦闘に巻き込まれてリボーに助けを求めるという体をとってコロニー侵入に成功した。

実は連邦軍はコロニー部隊(リボー使用)と密約を交わしていた。コロニー内にMS部隊を駐留させていた。ただしこれは明かに国際法違反である。



公国軍特務部隊に命じて連軍を試みる連邦軍MS部隊。この時に改されたのはジム・コマンド宙転機だったが、乗員は他船の存在には気づかなかったようだ。

リック・ドムⅡ他

ソロモン進攻

ジャブロー降下作戦に失敗した公国軍は地上からの進軍を開始。一方、新たに進出された宇宙艦隊をルナツー宙域に前線した連邦軍は、公国本国の位置するサイド3への進攻を計画。その足掛かりとして公国軍宇宙軍・ソロモン攻撃隊(チェンバロー作戦)を開始した。U.C.0079.12.24、ティターンズ艦隊とフック艦隊で構成された連邦軍艦隊がソロモン宙域に接近。前面に展開したフック艦隊がビーム攻撃を展開する一方、サイド4の援射を断つためにティターンズ艦隊が要索突撃兵器の準備を開始した。太陽光を反射、集中させて都市を焼灼するソーラーシステムである。この兵器によってソロモンは大打撃を受け、その隙を以て連邦軍艦隊はソロモンに接近した。



軍内部に突入したムとボールによる連邦軍隊。小隊単位で行動することで軍内に侵入すること、公国軍艦隊へのMAビーム・ザムの前に襲っている。

ビッグ・ザム 他

ア・バオア・クーでの決戦

ソロモン陥落によって本土絶対防衛戦の一角を失った公国軍は残存兵力を宇宙要塞ア・バオア・クーに集結。対する連邦軍はア・バオア・クーを包囲してサイド3の公国本国に進攻する「星一作戦」を実行に移した。ア・バオア・クー到着直前のU.C.0079.12.30、ソーラー・レイの一撃で艦船の30%と作戦司令部のレベルを失ったという。同年12.31、再襲撃を終えた連邦軍艦隊が軍事攻勢を開始した。開戦からしばらくは要索に立てこもった公国軍が有利に進んでいたが、戦線維持の要となる宇宙宙域、ドックの轟炸によって逆転。次第に連邦軍が攻勢に転じ、ついに要索の電力供給が停止した。そして最終的にサイバに代わってジオ共和国臨時政府が降参戦を申し入れ、戦況終結となったのだ。



ソロモン以降、連邦軍はジムを中心としたMS部隊を大軍に生産。物語にもはげしく登場を演じた。公国軍もガンダムなどの新機體を投入したものの実戦機体数が圧倒的に足りず、劣勢を挽回するに至らなかった。

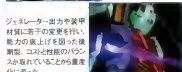
MS OTHER 戦記

「ジムタイプ」というジャンル

一年戦争における連邦軍の主力量産MSといえるジムだが、ある意味でこれは総称であり、ジムタイプと言い換えたほうがより正確と思われる。なぜならMSの配備を急ぐ連邦軍は急ピッチで独自MSの開発を行い、その結果、短期間で仕様の異なるジムが次々と誕生。それらが混在する形で実戦投入されたからである。ルナツー工廠で試作された初期型と呼ばれる機体を経て、U.C.0079.09頃に本格的な生産が開始。ジャブローで生産された42機の第一次生産機は「初期型」と呼ばれた。一方、キャッパルニア・ベースやジャブローで生産された288機は「後期型(実戦型)」と呼ばれる。これだけでも混乱を来たすそうだが、ジムは派生機の設計母体として利用されたこともあり、さらに分化。一般によれば、一年戦争終戦までに3,800機(ただし派生機も含む)が生産されたと言われ、まさにジムタイプというカテゴリー設定が相応しい状況となったのだ。



コストを抑えて生産性を高めた前期型。細かな性能に注目すべき点はいくつかある。本機で培われた技術が、後継機の開発に貢献している。



ジェネレーター出力や装甲材質に若干の変更を行い、能力の向上を図った後期型。コストと性能のバランスが取れていたことから量産化に成功した。



ガンダムはジオンとの対決で一歩とない。戦されたホワイトベースの機体にもジムが入り込んでいた。文書も記載されている。

ヴェーザルグ 他

ジムタイプ、発展と衰退の果て

一年戦争を通じて連邦軍の主力量産MSの座を維持したジムタイプは、戦後さまざまなバリエーション機の母体として利用された。さらにU.C.0083には「連邦軍再建計画」の一環として、ジムの後継機が設計された。それがジムIIである。しかし機體を最新鋭にしたとはいえ、U.C.0079の基礎設計が第二、第三世代MSに大打打ちであるにもかかわらず、単なる改良版に終わった。U.C.0090年代までは生き残り、運用され続けたようだ。

U.C.0096のダカール地区にはジムIIやジムIIが配備され、地区防衛にあてられていた。とはいえ、どこまで有効だったかは定かでない。



ジムタイプの後継機となったのがジオン(商標はメガロイド)。ジムと同様、さまざまな派生機を生み出し、U.C.0120年代まで後継で継続した。

- 11月 連邦軍、ジムを使用した実戦データ収集部隊を設立。
- 11月7日 連邦軍、オデッサ作戦を開始。
- 11月9日 オデッサ作戦、終了。以後、欧州からアジア地区における公国軍勢力は衰退を始める。
- 11月30日 公国軍、ジャブロー降下作戦、開始。
- 12月 公国軍特務部隊(サイクロプス隊)、連邦軍北極基地を襲撃。
- 12月13日 公国軍、サイド6のリース・コロニーを強襲。
- 12月24日 連邦軍、ソロモン攻勢戦、開始。
- 12月31日 連邦軍、ア・バオア・クー攻勢戦、開始。

U.C.0080

- 1月1日 一年戦争、終結。

一年戦争後期、地球連邦軍初の主力量産MSとして誕生したジムは、約3ヶ月という終戦までの短い期間にもかかわらず、数々のバリエーション機を生み出している。

KEYWORD

RX計画

一年戦争開始以前のU.C.0078.03に開始された、連邦軍のMS開発計画。MSの基礎研究に繋がる複数のプロジェクトが、同時並行的に進行していた。

V作戦

U.C.0079.04.01に着手された、連邦軍のMS開発計画。MSの量産化、MS運用機の開発、MSの運用法の模索など、MSの包括的研究開発がなされた。

RGMシリーズ

連邦軍が装備する汎用の主力量産MS。ジムとその派生型の大半が該当し「RGM」を含む型式番号が付される。空挺用や水中用は基本的に例外。

RX-78-2 ガンダム

一年戦争後期に実戦投入された、連邦軍の自衛戦闘用試作MS。連邦軍で初めて「自衛戦闘用の機動歩兵」というMSの本質的姿を実現した。ヒュー・ライフルやルナ・チタニウム合金製装甲などの革新的技術を採用したうえ、空中戦や水中戦すらこなす万能機でもあった。



簡易生産

分析・研究



RR1-06 ザニー

用意したザクの構造を転用開発局が研究・分析した末、開発された機体。グラナダのシオニック社から秘密裏にパーツを手配させ、完成したといわれる。中途半端な設計から故障率が高かったが、パイロットの訓練や二足歩行システムの開発に貢献した。

RGM-79 ジム

「V作戦」において完成した連邦軍初の量産主力MSで、ガンダムの簡易生産型にあたる機体。ガンダムの特長であったルナ・チタニウム合金制装甲、コア・プロセッサシステム、大気圏突入装置などが廃止されたものの、簡易機に迫るカタログスペックを有するうえ、ビーム兵器も標準装備した。新開発された初期の機体（いわゆる「先行無型型」）は純粋な生産性を発揮できなかったが、それでも数々のジオン公団軍のMSを撃破し、一年戦争末期の戦いで連邦軍を勝利に導いたのだ。簡易型も多く開発されている。



簡易生産

RGM-79[G] 陸戦型ジム

ジムの量産以前、前線の実戦で開発された先行試作型の陸戦用MS。陸戦型ガンダムの生産ラインで製造されたため、一般的なジムと形状が異なる。ルナ・チタニウム合金の装甲を備えるなど性能は陸戦型ガンダムに迫るが、生産性やジムとの互換性は低い。



チームカスタマイズ

RGM-79

ジム

(ジャック・ザ・ハロウィン隊)
第24哨戒部隊「ジャック・ザ・ハロウィン隊」指揮官のジャック・ベアード少尉の乗機。マウント、ラッチを介して、ランドセルの右側にハイパー・バズーカを懸架した。部隊旗を含むマーキングはサラミス改フジ量産ルガに所属していた際のものだ。



チームカスタマイズ

RGM-79

ジム

(ホワイ・ティンゴ隊)
オーストラリア方面軍司令部直属の特殊遊撃MS部隊「ホワイ・ティンゴ隊」(隊長マスター・P・レイヤー中尉)が運用したジム。部隊カラーであるグレーで塗装されたほか、ティンゴをかたどった部隊章が記された。降紐に合わせた調整がなされたようだ。



総合性能向上

改造

部品共用

分析・研究

RGM-79 ジム指揮官機

ガンダム同様、ランドセルに2本のビーム・サーベルを搭載したチューンタイプで、ツインサーベル型とも称される。通常は隊長機として使用されたが、ジャック・ザ・ハロウィン隊ではアダム・ステイングレイ曹長がベアード少尉機を拝借したこともある。



RGM-79[E] 初階型ジム

ジムの本格量産以前、宇宙に配備された機体。製造はルナプーで行われた。存在そのものが秘匿されており、連邦軍内でも知る者はわずかだった。テリール・サンダースJr.機はビーム・サーベルを搭載しなかったが、これが初階型の共通仕様かは不明である。



TGM-79 ジムトレナー

パイロットの養成を目的とした、ジムのバリエーション機。コックピットは上下配列の複座式となっており、恵付きの上段に教官、下段に訓練生が搭乗する。装甲こそ実戦に耐えるものではないが、機体バランスは通常のジムと同様で、兵装も搭載可能である。



RGM-79U ジム・スループ

U.C.0079 12にロールアウトした、水中活動用オプション搭載型ジム。水流エンジンとバラストタンク搭載の大型バックパックを背部に、補助バラストタンクを脚部に搭載した。水上を航行可能な装置として、手持ち式のソナー・ガンを設置する。



RG-79 アクア・ジム

ジムの水中用派生型。オプショんに依存するジム・スループと異なり機体そのものを大幅に改修。背部や脚部にハイロッド・ジェット・ユニットを搭載した。ごく短期間で増産のために改修されたため機体バランスは悪かったが、20年近く運用され続けた。



水陸両用仕様

発展

総合性能向上

RGM-79SC ジム・スナイパーカスタム

エースパイロットの求めに応じて開発された総合性能向上型ジム。白兵戦闘能力を強化された一方で、R-4ビーム・ライフルを用いた長距離追加撃力にも秀でている。トータル性能はガンダムに匹敵するとまでいわれるが、兵装の個体差が激しかった。



チーム
カスタマイズ

RGM-79SC ジム・スナイパーカスタム (シモダ小隊仕様)

ア・バオア・クー攻防戦に参加したシモダ小隊の所蔵機。MS標準型のミサイル・ランチャーを分解し、ランドセルの左右に接続した。ジム・スナイパーカスタムの生産数は50機ほどに過ぎないが、パイロットに合わせたカスタマイズ例が多かったといわれる。



RGM-79HC ジム・ガードカスタム

ジム・スナイパーカスタムを基にチューンナップされた防御性能向上型。友軍機、艦隊、軍事施設の防衛任務を主眼に開発されており、ガーディアン・シールドと呼ばれる巨大シールドを装備した。その新機軸と原型機由来の機動性により、友軍を守った。



改造

エース仕様

RGM-79L ジム・ライトアーマー

一撃離脱戦法を想定した高機動仕様ジム。ビーム兵器の運用に際しては、命中率と破壊力が勝敗を決するとの戦術理論に則って開発されており、ガンダム用と同システムのビーム・ライフルを装備する。機動性の強化は徹底した軽量化による部分が大い。



特殊部隊仕様

RGM-79V ジム・ナイトシーカー

空挺任務に対応した、奇襲作戦用のジム改修機。重要拠点を奪還に際しては、迅速かつ秘密裏にMS機群部隊を送り込む必要があるとの判断から開発された。ランドセルと胸部にスラスターを増設しており、射面上では最高6,000mの高度から降下可能であった。



陸戦仕様

RAG-79-G1

水中用ガンダム

エースパイロット用の水陸両用MS。出力、機力、武装などが全面的に強化されており、手持ち武装として水中用偏向ビーム・ライフルを搭載する。名称こそ「ガンダム」だがアクア・ジムの再設計機であり、胴部形状をガンダムに近づけたに過ぎなかった。



基本仕様

改造

RGM-79-KC

ジム・インターセプトカスタム

ジム・スナイパーカスタムの生産後期型にあたる機体で、頭部、脚部、ランドセルなどが変更された。生産性も向上している。推進器や武装を備える大気圏外用の量産機ブースター「フェロウ・ブスター」に対応し、その固定用ジョイントを備える。



RGM-79-SC

ジム・スナイパーカスタム(近代改修)

UC 0080 年代中期、ジム・スナイパーカスタムを近代化改修した機体。コクピットを全天周モニター・リニア・シート併用型に換装したほか、新型MSと手持ち武装の互換性を高めたと見られる。グリプス戦役時、ジャブローの防衛に参加した機体が特に知られる。



RGM-79-LV

ジム・ナイトシーカーⅡ

ジム・ライトアーマーをベースに、ジム・ナイトシーカーと同様の改修を加えた機体。追加スラスターは爆発ボルトによる排除システムを備えており、ジム・ライトアーマーの機動性能を維持しやすい。排除機能ほのちにジム・ナイトシーカーにも導入された。



RGM-79-F

陸戦用ジム

ヨーロッパ戦線を中心に運用された、ジムの現地改修型。市街戦での被害率が高かった上半身の装甲を重点的に強化しており、ザク・マシンガンの変態にも耐えられる。量産平化に伴い機動性こそ若干低下したものの、パイロットの生産率は高かった。



RGM-79-F

デザート・ジム

ジムの乾燥地対応仕様で、陸戦用ジムの基に開発されたという(アフリカ戦線の現地改修機とも)。エアインテークや履帯に防砂・防塵処理をしたほか、リアアクティブ・アーマー(爆発反応装甲)を備え、乾燥地での運用性と耐塵性が同時に強化されている。



改良

熱帯仕様

一年戦争を勝利に導いたジムは戦後も改修されつつ配備が続き、UC 0080 年代前期にはRGM-79C ジム改、中期にはRGM-79R (RMS-179) ジムⅡ、末期にはRGM-66R ジムⅢが主力化された。この間、RMS-106 ハイザックをはじめとする公国系の性能導入が顕著な連邦軍主力MSも登場したが、継続運用されたのはジム系列の機体であった。ジムⅡを最後に「ジム」の名は消滅するが、その血統は連邦軍の主力MSに継承されていった。



RGM-79R (RMS-179) ジムⅡ

一年戦争時のジムは短期間で膨大な数の派生型が誕生したが、初期の時点で先行試作や先行量産の視野も広がっており、早期戦力化のための思考錯誤が繰り返された。

RGM-79 ジム

ガンダムをベースに開発された汎用・自衛戦用の主力量産MS。セミ・モノコック構造やフィールド・モーターといった基礎技術は、RXシリーズから継承されている。胴体内は非変形型のコア・ブロックシステムに近い構造となっており、改修が容易であった。



RGM-79[G] 陸戦型ジム

先行試作という形で、陸戦型ガンダムと同じ生産ラインで量産された陸戦用MS。実戦投入されたジムとしては最初期のものだが、陸戦型ガンダムと類似するフォーマットであり、通常のジムタイプとの互換性は低い。生産数は比較的多かったと見られている。



発展

RGM-79F 陸戦用ジム

ヨーロッパ戦線に投入された改修機。推進率の高い上半身の装甲を強化すると同時に、スラスターを6基に増加することで機動性の低下を軽減。結果、パイロットの生産率が格段に向上した。



RX-79[G] 陸戦型ガンダム

ガンダムのロールアウト後、MSの早期戦力化を望む地球連邦陸軍(陸軍省)の管理下で量産された陸戦用MS。歩留まりの悪いガンダムの全動パーツを運用しているが高コストな機体であり、陸戦型ジムとともにジム量産化までの橋渡しの存在に過ぎなかった。

簡易生産

発展

簡易生産

RGM-79D ジム 寒冷地仕様

いわゆる「後期生産型」をベースに開発された寒冷地仕様のジム。北極に代表される極端な低温環境での運用を想定しており、関節部には氷結防止装置が施された。一年戦争時の陸戦仕様のジムタイプMSとしては、最高度の遠距離運用能力を持つことでも知られる。



発展



RGM-79G ジム・コマンド

コロニー内での運用を主目的とする派生型で、ジム寒冷地仕様をベースに開発された。機体防衛に特化した機体といわれている。本仕様の派生型に、コロニー周辺宙域での運用に適したRGM-79GSジム・コマンド宇宙仕様(ジム・コマンドスペース)がある。

RGM-79[E] 初期型ジム

量初期に実戦配備されたジムタイプの機体。陸戦型ジムとは反対に、宇宙用の機体だったようである。史上初のMS対MSの実戦とされるサイド7激闘戦の直後、U.C.0079.10中旬には既に配備されていた。ルナツーで生産されたが、その存在は秘中の秘だった。



改良



RGM-79C ジム改

細部改造された初期のジムと異なり、本来の設計に準拠することで高性能を達成した「後期生産型」の機体。ア・バオア・クー戦に投入された後期型ジムと同仕様と想われ、U.C.0080年代初期には連邦軍の主力MSとして宇宙・地上を問わず広く配備された。

中距離支援用MSという新境地を開拓したガンキャノンは高く評価されたが、ガンダム同様、そのままでの量産化は困難であり、ジム・キャノンの開発に至った。

RG-79 ジム

連邦軍初の主力量産MS
ジムは、品質より量産を優先する軍上層部の意向と、製造ラインの混乱を除けば、ガンダムの基本設計を継承した優秀な機体であった。量産化が進むと一部のパーツがジム・キャノンに採用され、優秀な基本設計が改めて証明された。



部品共用

RG-80S ジム・キャノン (空間突撃仕様)

宇宙仕様のジム・キャノン。脚部の分断式増加装甲を外すとともに、ジム・スナイパーカスタムと同型のバーニアスラスターを備えることで、戦闘時の姿勢制御能力の向上が図られた。ア・バオア・クー攻防戦に参加したが、大半の機体が失われたという。



宇宙仕様

RG-80 プロトタイプ ジム・キャノン (タイプ2)

プロトタイプ ジム・キャノンとジム・キャノンの中間的仕様。360mmロケット砲の基部、膝から足首にかけての量産平化など、ジム・キャノンの特徴的構造が見られる。本機をさらに簡略化し、ジムのパーツを多数導入してジム・キャノンが完成した。



改良

RG-80 ジム・キャノン

ガンキャノンの量産機にあたる中距離支援用MS (ジムの中距離支援型ではない)。360mmロケット砲を1門のみとしたうえ、ジムとの部品共有率を60%以上にすることで、高い生産性を実現した。脚部にはカウンターウェイト兼用の分断式増加装甲を備える。



生産

RX-77-2 ガンキャノン

RX計画 (V作戦) で開発された中距離支援用の試作MS。ガンダムと比べて機動・運動性に劣るが (それでもザクとは互角以上)、火力と耐弾性に勝る。それまで公国軍には存在しなかった支援用MSの有効性を示し、MSの戦術にも大きな影響を与えた。



RG-80 プロトタイプ ジム・キャノン

ガンキャノンの量産化のための試作MS。コア・ブロック・システムを採りつつ、上半身のみキャノン砲装束の支援型としたが、キャノン砲発射時の重量バランスや安定性に問題を抱えていた。その後、両腕と両脚にカウンターウェイトの装甲を搭載した。



生産

RG-80 ジム・キャノン (近代改修)

戦後も継続運用されていたジム・キャノンを、U.C.0080年代中葉の新技術で近代化した仕様。コクピットを全天候モニターとリア・シートの併用型としたほか、手持ち兵装としてジムII用と同型のビーム・ライフルを装備した。因はジャブロー所蔵機である。



改良

RG-83 ジム・キャノンII

一年戦争後に開発されたジム・キャノンの発展型。2門のビーム・キャノンやチョバム・アーマー系の重装甲を採用するなど、高耐久機体だった。新重そうに見えるがジム改と同程度の運動性を有するうえ、ビーム・サーベルを用いた近接戦闘にも対応する。



発展





RGGM-79
GM



モノコック構造

最初期のMS用柔軟構造となったモノコック構造は、内部容積の確保や構造の単純化といった面でメリットがある。ムーバブル・フレームの普及によりMS本体での採用例は激減したが、外装オプションなどに多用されている。

モノコック系構造の基本技術

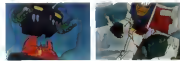
MSのモノコック構造[方式]は一種の「外骨格」であり、強度部材と装甲が一体化した装甲外殻となっている。生物でいえば甲殻類に相当する構造である。類似技術のセミ・モノコック構造[方式]は装甲外殻と内張り式のフレームを組み合わせており、モノコック構造同様、これのみで機体の支持と耐弾性を担うことが可能だ。前者はジオン公国軍、後者は地球連邦軍で多用された。



頭部、胸部、大腿部などの各ユニットを(セミ)モノコック構造とし、それを関節で接続する形でMSが構築される。

利点と欠点

最初期のMS開発において、MSの単純構造部分(基本構造)をどのようなものにするかは大きな問題となつた。のちのムーバブル・フレームに近い構造も模索されたという。最終的に採用されたモノコック構造は、軽量かつ内部容量(ペイロード)が大きいという利点を有していた。後発となったセミ・モノコック構造もモノコック構造に近い利点を持つつつ、装甲の分割が可能であった。



(セミ)モノコック構造は内部を「がんごん」にできる反面、被弾時の強度低下や駆動性の限界といった問題を抱える。

モノコック構造の興隆と衰退

最初期のMS開発の過程で誕生したモノコック構造は、派生型のセミ・モノコック構造を含め第一世代MSの基本構造として普及した。だが、拡張性や駆動性に勝るムーバブル・フレームが実用化されると、MSの基本構造としての採用率は急減する。それでも、一部のMS用オプションや宇宙用主機などで用いられ続けた。

1 モノコック構造の誕生と普及

公国軍とジオン

ク社による最初期のMS開発なかで、MSのモノコック構造が確立。MS-03で初めて導入されたといわれ、以後、公国軍のMSが採用。



MSが実用段階に入る以前、既にモノコック構造は完成していたようだ。

3 モノコック構造の衰退

クアス戦役期に

ムーバブル・フレームを採用した第二世代MSが加加速的に普及し、以後(セミ)モノコック構造の第一世代MSの開発例は激減していた。



第三世代以降もムーバブル・フレームで、モノコック構造はほぼ消滅。

■モノコック

ジオン公国軍のモノコック方式は装甲内の容積を大きく取れるというメリットがあった。その反面、堅固性に劣るなどのデメリットも見られた。



MS-05
ザクI

■メリット

- ・強度部材と装甲の一体化による軽量性
- ・中空構造による大きなペイロード
- ・装甲の分割による損傷箇所の交換(セミ・モノコック構造のみ)

モノコックは「箱」型の構造であるため内部の容積が大きい。強度と軽量性に優れる。熱核反応炉、駆動系、コクピットといった機器は「箱」に格納される形となる。



フレームを併用するセミ・モノコック構造は容積の面でわずかに劣るが、分割式装甲により損傷箇所の交換が可能である。

■セミ・モノコック

地球連邦軍のセミ・モノコック方式は、モノコック方式よりも装甲内の容積には劣ったが、堅固性やダメージコントロールの面で優れていた。



RX-79[G]
陸戦型ガンダム

■デメリット

- ・装甲外殻の損傷が強度の低下に直結
- ・外部拡張性の制約
- ・駆動性能の限界

装甲外殻で自重を支えつつ戦闘機動に耐える構造のため、装甲の損傷程度によっては自立すら困難となる。機器を内蔵する構造は外部拡張性を制限した。



装甲外殻を関節で連結する構造上、可動範囲や柔軟性に制約があり、その面でムーバブル・フレームにおよばない。

TECHNOLOGY INFO

バルクヘッド構造

MSM-07 スズギックに代表されるジオン公国軍の水陸両用MSでは、モノコック構造の一種といえるバルクヘッド構造の採用例がある。MSのバルクヘッド構造とは、機体各部を独立したブロックに区分けしたもので、ユニット単位の交換が容易なうえ、損傷時の浸水を局限できるというメリットがあった。



マンパワによる浸水時のダメージコントロールが期待できないMSは、浸水被害の防止を構造面に求めるのが一般的である。

MSM-07 スズギック

バルクヘッド構造を採用した水陸両用MSの一種で、堅固性に優れる。胸部を別モデルに換装可能ともいわれる。



2 セミ・モノコック構造の採用

連邦軍のMS開

発において、公国軍とは異なるセミ・モノコック構造が採用された。RXシリーズのコア・ブロック・システムは、この意思によるもののようだ。



初期可変MAも、セミ・モノコック構造と思われる。

4 外装オプションでの採用

MSの基本構造

としての(セミ)モノコック構造は廃れたが、外装式のプロペラント・タンクや増加AMBAC枝のバインダーなどのオプションで採用。



バインダーはセミ・モノコック構造で、推進剤や燃料などを内蔵する。



MSM-070i セーゴックモビルダイバーシステムの電算機ユニット。スズギックのバルクヘッド構造を利用し、右腕や下半身を換装した。

V作戦

開発に遅れた地球連邦軍だが、一年戦争の緒戦でジオン公国軍のMSに爆滅されたことで、MSの量産化や運用法の確立を目指す「V作戦」を発動した。この進展は劇的で、4年3月にはMSの試験投入を開始し、末期には大規模なMS部隊を擁した。――



地球連邦軍初の 包括的MS開発計画

一年戦争において地球連邦軍が実施した「V作戦」は、試作MSの開発とデータ収集、それをもとにした主力MSの開発と量産化、MS運用艦の建造、MSの運用法の確立などを網羅した、包括的MS開発プロジェクトであった。

V (Victoryの頭文字) 作戦が実施された背景には、一年戦争緒戦での連邦軍の惨敗がある。比較的早い時期から公団軍によるMS開発を察知していた連邦軍は、開戦の10ヶ月前にあたるU.C.0078.03、MSの基礎研究プロジェクト「RX計画」を開始した。しかし、兵器開発の本流とはならず、MS対策がなされないまま一年戦争が勃発したのだった。

その結果は、一週間の戦争とルウム戦役での連邦軍の敗北である。連邦軍が無敵と信じた宇宙艦隊はMSとミノフスキークラフトにまったく歯が立たなかったのだ。その後、連邦軍ではMSの開発を主張する一派の影響が激増し、U.C.0079.04.01、RX計画や宇宙空母開発計画「SCV-27計画」を統合したV作戦が開始される。これによりRX-78 ガンダムやベガス後継機開発艦、そして連邦軍初の主力量産MS・RGM-79 ジムなどが誕生することとなった。

連邦軍MSの基礎となった RX計画とその問題

一年戦争以前、ジオン公国は作業用重機を装ったMSのデモンストレーションを公開した。連邦軍の反応を確かめるためである。レーダー反射面積が大きく固定武装を持たないことから、MSの有効性を一矢に付した連邦軍だったが、公国軍がMSによる小規模な軍事行動を実施すると、MSまたはその対抗手段の研究開発に着手。それがRX計画である。

だが当時「ミノフスキー粒子環境に最適化された白兵戦用機動歩兵」というMSの本質を理解した連邦軍将校や技官は皆無で、MSのあらゆる模索、基礎技術の研究開発、公国に対する諷刺活動などの基礎研究プロジェクトに過ぎない。だが、一連の研究は一年戦争開戦後のV作戦で大きな意味を持つに至った。

RX計画に端を発する新技術

RX計画では、五本指ミニビュレーター、二足歩行システム、小型熱核反応炉といったMSの基礎技術の研究開発とともに、連邦軍独自の技術開発も行われている。なかでもビーム兵器の小型化と搭載難易度の低下をもたらしたエネルギーCAP、耐熱性や軽量化に優れたルナ・チタニウム合金の技術は、公国軍を上回ることとなった。

■エネルギーCAP

縮退寸前のミノフスキー粒子を蓄積可能なデバイス。ビーム・ライフルとビーム・サーベルの中核技術で、ビーム兵器の運用制限を緩和する。



■フィールド・モーター

1フィールドとミノフスキー粒子の相互作用を利用した簡易用モーター。小型軽量かつ高出力で、マグネット・コーティング処理にも対応する。



RX計画と試作MS群

RX計画では複数のプロジェクトが同時並行的に進められており、早い段階から試作機も登場した。当初は「鉄塊」と評される次世代主力機体研究機RTX-44のような、MSの本質とかけ離れた機体が目立った。だが、一年戦争が勃発すると公国軍MSを撃破する機会が増えたり、V作戦後の統合もあって、真の意味でのMSが誕生した。

■RX-75シリーズ

RTX-44が原型の旋回式の真鍮製支援用MS。陸戦用MS支援兵器として優秀である。RTX-44は陸戦機型ガンタンクにも発展した。



■RX-77シリーズ

二足歩行システムを採用した中距離支援用MS。MSの本質から乖離した機体に思われるが、宇宙・地上を問わず火力支援が可能である。



■RX-76(RB-79)シリーズ

宇宙用の軽型MSで、公国軍ではモビルボグと呼ばれる分類の機動兵器。試作機はV作戦以後に完成したともいわれる。



■RX-78シリーズ

V作戦開始後、RX-77と同時並行的に開発された白兵戦用MS。真の意味での「白兵戦用機動歩兵」であり、ビーム兵器を搭載する画期的MSだった。



さらに特殊だったのが射出機構と管制ユニットを兼ねるコア・ブロック・システムで、交戦テスト時の運用データとパイロットの回収を重視したガンタンク、カンキャン、ガンダムで広く採用されている。これは、試作MSとテストパイロットが極めて貴重でありながら、実戦テストを実施せざるを得なかったV作戦に適した技術であった。



二足歩行ユニットの研究開発であるRXM-1、ガンダムの前身にあたる小型機X-78など、RXシリーズの技術が試験されたと言われる。

■ルナ・チタニウム合金

チタンを基料とする合金で、耐熱性、放射線耐断性などに優れた。開発されたのはU.C.0064だが、RX計画ではMSの装甲用に改良された。



■教育型コンピューター

学習機能によりMSの動作を最適化し続ける。MS用機体制御・操縦支援システム。ミノフスキー粒子の影響を受けない光素集回路の使用例が多い。



■セミ・モノコック構造

連邦軍のMSで採用されたMS用基本構造の一種。装甲外殻と内部フレームを併用しているため装甲の分割が可能で、交換が容易である。



■コア・ブロック・システム

MSのコクピットと射出装置を兼ねる中央モジュール・システム。軽戦闘機コア・ファイターに变形するため、緊急時の生存性が極めて高かった。



参加企業と参加技師

MSが複雑な兵器だったこと、それに伴い研究開発の裾野が広がったことなどにより、RX計画とV作戦の参加企業や技術者の数は膨大なものになった。RXシリーズの開発において、エネルギーCAPやコア・ブロック・システムといった新技術を盛り込んだうえ、公国軍とは異なる技術を採用したことも、参加企業の増加につながった。

| 社名 | 担当技術 |
|---------------|------------------------------------|
| ダキム電機 | 熱核融合炉・エネルギー・推進器・熱核シールド (ロケット・エンジン) |
| ハイウェル工業 | 熱核融合炉(ジェネレーター) |
| スターフィールド造船 | ラングセル |
| パイナーク・プラム・カス社 | ラングセル |
| ウッドランド・ジャシール | ラングセル |
| プラント・テクノス社 | シャーン |
| ブレンメタル社 | シャーン |

がった(イオタ工業のように、計画の存在を知らないうちに部品を提供した企業も存在する)。軍の技術部も計画に深く関与しており、ガンダムとカンキャンの開発を提唱したテム・レイ技術大尉、マグネット・コーティングの理論を完成させたモスク・ハン博士、ガンキャンの開発に関わったエイガー中尉が知られる。

| 社名 | 担当技術 |
|-----------------|------------------------|
| ササミ電機 | シャーン |
| ハルビー社 | コア・ファイター |
| サムソン・システム | フィールド・モーター(軍技術部との共同開発) |
| サウス・サウス・モーター | 電機モーター |
| B.O.K.D.A.技術研究所 | リニアシステム |
| コア・カブ電機工業体 | リニアシステム |
| フリーダ・ダール | 新素材 |
| ニッポル工業 | 計測機 |
| スズメ社 | 防弾防刃装置 |



テム・レイ 技術大尉
モスク・ハン 博士

| 社名 | 担当技術 |
|----------------|-------------------------------------|
| マツム・ソニック社 | 自動制御システム |
| イオタ工業 | 機体コア・ブロック・ファイター・コア・ブロック |
| ミグレン社 | オート・ランサー |
| アナハイム・エレクトロニクス | 教育型コンピューター |
| ブラッシュ社 | エネルギー・CAP・ビーム・ライフル・ガンダム用・ハイパーバスター・カ |
| ボック社 | ビーム・ライフル・ガンダム用・リニア・システム |
| ノーフォーク工業 | ビーム・ライフル・ガンダム用 |
| ト・カン・ガンダム | 60mm・ガンダム用 |

RXシリーズ各機の量産化

V作戦は運用法の確立に至る包括的なMS開発計画だが、最終先事項が量産MSの開発だった。ミノフキー粒子の広域・高濃度散布が常態化した宇宙世紀の戦場において、MSを戦力の中核に据えた公国軍に勝利するためには、多くのMSが必要だったためである(RX計画ではMSを掌握する対抗兵器も模索されたが、大きな潮流とはならなかった)。

一年戦争における連邦軍の主力量産MSは、ほぼすべてがガンタンク、ガンキャノン、ガンダムをベースとするものであり、原型機の簡易生産型にあたる。これはRXシリーズが採算を度外視した高性能機だったためで、ガンダムを量産化したMSシムで置き換える傾向となっている。



シムの開発と量産により、V作戦の目的はほぼ達成された。正式量産以前に、先行量産機や量産機開発機も開発された。

RX-75 → RMVシリーズ

陸戦用の兵隊専用MS。AFV(装甲戦闘車両)的性格を強く持つ。MSならではの汎用性は高かった。試作機と量産機試作モデルは1~2人乗りだが、モデルビルドに分類されるガンタンクⅡは車員、助手、運転手の3名が搭乗する。

RX-76 → RBシリーズ

空間作戦用のスペース・ボグSP-WD3を基に開発された。支援用の砲身MS。試作機はほぼその量産化された。低コストだが戦闘能力は低くMSのままだることが多い。作業用や水中間などの派生型も開発された。

RX-77 → RGCシリーズ

中距離支援用MS。キャノン砲に代表される主戦火器を固定装備しており、当時は連邦軍独自のMS分類であった。量産化されたものの生産数は少なく、ハイパーバズーカ装備のジムやボールで代替された例が見えられた。

RX-78 → RGMシリーズ

MS戦力の中核をなす、汎用の白兵戦用MS。手持ち式のビーム兵器を標準装備する。量産機のジムは、ザクⅡやリック・ドムに勝るカラビナスペックを持つが、初めに絶賛された機体は本来の性能を発揮できなかった。

試作実験モデル

量産機試作モデル

制式採用モデル

RX-75
ガンタンク

RX-75
量産型ガンタンク

RMV-1
ガンタンクⅡ

RX-76
ボールプロトタイプ

RX-76
ボール

RB-79
ボール

RX-77-2
ガンキャノン

RX-77D
ガンキャノン量産型

RGC-80
ジムキャノン

RX-78-2
ガンダム

RGM-79
ジム

TECHNOLOGY INFO

ビンソン計画

一年戦争の終戦で失われた宇宙艦隊の再整備を目指す「ビンソン計画」では、ジャブロー・ルナツーで多数の宇宙艦艇が建造された。ただし、V作戦との接点がほぼ存在せず、多くの艦艇はMS運用能力がなかった。



ビンソン計画で開発されたというコロンプス級宇宙輸送艦。MS運用型も存在したようだ。

マゼラン級
宇宙戦艦

サラミス級
宇宙巡洋艦

第16独立戦隊

ホワイトベース隊以外にも、ベガス級強襲降参艦とRXシリーズを装備した部隊は存在する。その代表がベガス級サラブレッドを母艦とする第16独立戦隊で、2機のガンダムタイプとガンキャノンとを装備していた。



RX-78-4
ガンダム4号機
(G04)

RX-78-5
ガンダム5号機
(G05)

ベガス級強襲降参艦
(ホワイトベース隊専用型強襲降参艦)
サラブレッド

ペガスス級強襲機艦の開発

MS運用艦の建造も同時に開始された。開放型宇宙空母の開発を目指すSCV-27計画(SCV-27A計画とも)で建造されたホワイトベースを、MS搭載母艦に改造するものであった。この結果、誕生したのがペガスス級(ホワイトベース級)強襲機艦で、MSの運用能力は当然のこと、大気圏内外への対応、ミノフスキークラフトによる大気圏内外飛行能力、単独で大気圏再突入および離脱機能なども有する万能艦であった。



「前脚」にハンガーデッキを備え、MSの整備やカタパルトを用いた射撃などに対応した。



ミノフスキークラフトを搭載する。第2宇宙速度に達しなくても大気圏離脱が可能。



ホワイトベース
ペガスス級2番艦。一年戦争後期、主要な戦艦のすべてに参加した強襲艦。ア・バオア・クー戦で失われた。



ブランリバル



サブラブランド

V作戦の運用試験部隊——ホワイトベース隊

V作戦において最も有名な部隊となったのが、ホワイトベース隊(のちの第十三独立部隊)である。RXシリーズ受領のため訪れたサイド7で戦闘に巻き込まれたことから、なみ加的に戦い続けられ、一年戦争終戦まで戦い続けた。



AAA(トリプルアー)の機密性から公国軍に狙われ続けたが、ここここで逃げ、ニュータイプ部隊と噂された。

ホワイトベース隊の装備

サイド7で回収したRXシリーズをその主艦艦載し、終戦まで運用した。MSは白兵戦用のガンダム、中距離支援用のガンキャノン、長距離支援用のガンタンクで、数々の公国軍部隊を撃破していった。なかでも圧倒的な戦闘能力を発揮したガンダムは「白いヤツ」と呼ばれ、公国軍将兵に恐れられた。戦艦隊の運用もあった。

母艦 艦載MS(白兵戦用) 艦載MS(中距離支援用) 艦載MS(長距離支援用)



ホワイトベース



RX-78-2 ガンダム



RX-77-1 ガンキャノン



RX-75 ガングニフ

ホワイトベース隊の人員

輝かしい武勲を挙げ続けたホワイトベース隊だが、そのクルーはほぼ全員が士官候補生と民間の少年少女だった(のちに正規軍人として入隊)。サイド7遠征戦で正規軍人のクルーがほぼ全滅した結果、素人同然のクルーたちによる運用を強制されたが、ニュータイプとして覚醒をはじめたアムロレイを中心に急速に成長していった。



パオ/Ross



アムロレイ



シェロ・ハイセイ



カインティン



ブライトノア



ハヤト・コマツヤシ



セイラマス



スレッガー・ロウ

改修型MS運用艦の登場

ペガスス級の建造やMSの量産化を受けて、MS運用能力を付与した改修艦が登場しはじめた。サラミス級を改修したネルソング級MS軽空母、コロソス級のMS運用型などが知られる。



サラミス改修級ネルグ

サラミス級を改修した輸送艦。ア・バオア・クー戦では2機のジムが搭載していた。



一年戦争期の連邦軍の一般戦術は艦隊にMSを密着するだけで、整備などの運用はできなかった。



サラミス級宇宙洋艦(ボール搭載型)

甲板にボールの搭載プラットフォームを備えるタイプ。最大6機のボールを搭載可能であった。

RX計画とV作戦の推移

連邦軍がMSの研究に着手したのは一年戦争の前年で、戦術面を含む総合計画となったのは開戦後だった。それでも短期間でMSの量産化を実現し、戦勝に貢献した。

MSの存在確認

公国が作業用に偽装したMSのデモンストラレーションを公開。画像のなかには兵器としての可能性をうかがわせるものもあったが、連邦軍上層部は有効性を見出せなかった。



ジオニック社の公開演習には、作業用機としては不自然なものであった。

RX計画の始動

公国軍MSによる小規模な軍事行動が続発。連邦軍は対抗手段を模索すべく、複数のMS研究プロジェクトを同時並行的に進めるRX計画を開始。U.C.0078.03のことであった。



軍事研究の域を出なかったが、ガンタンク(長距離兵器)がロールアウト。

R連邦軍宇宙艦隊、MSに完敗

一年戦争の緒戦において、連邦軍宇宙艦隊が公国軍のMSに完敗。だが連邦軍上層部は公国軍の勝因を奇襲戦術に求め、MSを軽視し続けた。RX計画の成果も出ていなかった。



ミノフスキー粒子環境におけるMSの戦闘能力は、宇宙艦隊を圧倒した。

U.V作戦の実施

U.C.0079.04.01、MSの量産と運用法の確立などを旨とするV作戦がスタートした。RX計画とSCV-27計画はV作戦に統合され、包括的なMS開発プロジェクトとして再編された。



V作戦を後押ししたリトル将軍。MSの威力を、身を持って経験していた。

ガンダムのロールアウト

作戦開始から3ヶ月後の7月、ガンダムの1号機がロールアウトした。エネルギー・キャパ技術の確立によるビーム兵器の小型化や、ホワイトベースの進出も同時期に実現している。



白兵戦用試作MSとMS運用艦が遂に完成。V作戦は新たな局面を開いた。

R量産MSの設計と先行量産MSの誕生

ガンダムのロールアウトを受けて、その量産仕様機ジムが設計されるなか、連邦除軍の要請によりRX-79計画が実行に移された。これにより量産用の先行量産型MSが完成した。



量産型ガンダムが誕生。量産型ジムも生産された。

試作MSの実戦運用

サイド7遠征戦の結果、ホワイトベースとRXシリーズ3機種が、そのまま実戦配備に。ホワイトベース隊の実戦運用データは、ジムの開発とアップデートに反映されていった。



ホワイトベース隊は、V作戦最前線の実戦部隊として最初のものと化した。

Rジムの量産と配備

RXシリーズの量産仕様機の生産が開始。ガンダムの隔壁量産機にあたる主力MSジムは特に大量に製造され、連邦軍を勝利に導いた。ジムの派生型も多数開発されている。



一年戦争末期には多数のジムが投入された。地上でも配備が進んだ。

ルナツー

地球連邦軍最大の宇宙基地にして連邦宇宙軍の根拠地ルナツーは、一年戦争時の終盤に連邦宇宙戦線を支え反撃の足掛かりともなった。最前線となることはなかったが、グリプス戦役や「シャアの反乱」といった歴史的紛争でも大きな役割を果たしていった。

「辺境」のL3に鎮座する 連邦宇宙軍の根拠地

L3に位置する地球連邦宇宙軍の中核基地がルナツーである。元々はコロニー建設用の資源衛星として地球圏に運び込まれた小惑星ユノーで、UC0045に月軌道に固定された。

サイド3で独立宣言がなされた直後のUC0060、「60年代軍備増強計画」の一環として連邦軍の軍事宇宙基地に転用されたのち、UC0070にサイド7建設の名目でL3に移動した。サイド7を「城下町」としつつ、地球圏全域で見れば「辺境」に位置するルナツーの宇宙地政学的特徴は、この時点で決定された。主敵であるサイド3（ジオン公国）や宇宙の政治経済の中心地である月から最も離れているが、各サイドに連邦軍駐留部隊が存在するため、連邦宇宙軍全体を俯瞰した場合、攻守ともに大きな問題はないといっていだろう。

ルナツーの地勢が最大限に活かされたのが一年戦争であり、戦後で各サイドの駐留部隊が削減したのちも、公団軍の大規模攻勢を受けないまま宇宙における反撃拠点となった。その後、グリプス戦役ではティターンズの後方基地となり、第一次ネオ・ジオン戦争後は核兵器の貯蔵施設としても機能した。

ルナツーの地勢

進利宇宙軍の中核基地ルナツーは、月の反対側のL3に固定されている。この地勢の特徴は、敵の初撃による破壊を避ける、各地の駐留部隊に指示を出すのに適するほか、機密保持にも向いている。



ジャブロー同様、基本的に後方基地。のちにアクリス、アバオアクーとともに「ゼダンの門」を形成

ルナツーの規模

ルナツーの全幅は180kmにも達し、地球と月以外では地球圏最大の天体である。他の小惑星転用型基地が20〜30km程、スペースコロニーですら32〜45kmであることを考えれば、いかに巨大かが理解できる。

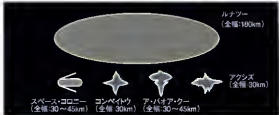


産業量がつかみにくい宇宙では特別困難だが、あ3号型コロニーと比較してもはるかに巨大だった。

ルナツーの位置



この図からわかる通り、ルナツーは他のサイドが置かれた各サブレンジポイントから離れた位置にある。各サイドへの移動は困難だが、宇宙勢力の攻撃を受けにくいという利点もある。



ルナツーの構造と各部

ルナツーはコンベイト（ソロモン）やアクシスと同じ、小惑星転用型の恒久宇宙基地であり、鉱山産出としての機能を残しつつ、宇宙港をはじめとする軍事施設、多数の将兵の長期滞在を可能とするコロニー、都市機能などがある。近傍にサイド4が存在するため、将兵のレクリエーションや移動の面で恵まれていたようである。



全幅180kmというサイズの都合上、対空監視網に穴が開きやすいが、全機能が停止に追い込まれる可能性は低かった。

■外観

変形したシンプルなシルエットが特徴で、複雑な形状の他の小惑星基地と明確に差別できる。表面に宇宙港の出入口、監視システム、対空火器などがあるのは小惑星基地としては一般的だが、表面積が極端に広い。



高層上とも思えるほどの広大なルナツーの地表面。ホワイトベースとファルメル確が「魔界」状態になったともいわれる。



一年戦争時のルナツーの全貌。資源技術の結果、時代ごとにわかに形状が変化しているようだが、別は無い。

■内部施設

巨大な恒久軍事基地という機能上、ルナツーの内部には数々の軍事施設や居住区画が存在する。司令室は基地の最高司令部として機能するが、あがりに巨大なルナツーの全状況を把握しきれないか不明で、一年戦争時は公国軍の上陸を許したこともあったといわれる。ピンターを受け入れるための客室も設けられていた。



一年戦争時の司令室は、人員不足のためか常駐将兵が少なく、全に機械化といえる。客室は遠心重力区画に位置

■宇宙港

駐留宇宙艦隊を擁することも、各部に宇宙港を備えている。通路を介して基地外と内部宇宙港を往来するタイプが目立ち、機体タイプは少ないようである。戦時時の検査の期限、エアロックの設置などが理由だろう。



ホワイトベースが入港した宇宙港。侵入者対策の一環として赤外線探知機を備えるが、公国軍にかりつけられたといふ。



出入口は各宇宙港にひとつづつという構成で、基地の内外をつなぐ通路は狭い。外部にはガイドビーコンを表示可能だ。

■その他の設備

目標にも対応する監視網、砲台をはじめとする火器、宇宙戦闘機用の発進口および発着口、作業用通路など、宇宙基地に必要な設備が多数配置された。宇宙艦隊以外の配備兵器は、一年戦争時は制空戦闘機「リアーズ」、その後はMSが中心となり、「シャアの反乱」期にはジェガンが配備されていた。



総合は対艦用と思われる、極めて巨大だった。U.C.0090年代前期にはジェガンを配備、艦隊は旧式のサファス改が主力だった。

所属将兵

一年戦争の緒戦で多くの連邦軍将兵が戦死した結果、戦争中期にはルナツーの配置人員も激減していた。少佐のワッケインが、基地司令と駐留艦隊司令を兼任していたことから、それは明らかである。



ワッケインはアバオアクー戦で戦死、ワッケインの部下リード中尉はホワイトベースとともに地球に降下し、北米で下船した。



ルナツー工廠と開発兵器

ルナツーは工廠を有し、一年戦争時にはピンソン計画に則って宇宙艦隊を建造したほか、ジムの量産を担当。サイド7 襲入前のガンダムの最終精密加工、G3 カンダムのマグネネ・コーティングも実施したという。

■一年戦争期のMS開発

一年戦争後期

から末期にかけて、

ジムタイプの派生型を数機種

開発（改修）した。

一部はコンベイト

と改修プランを

共有したようだ。



RGM-79SC ジムスナイパー カスタム



RGM-79GS ジムコマンド

■U.C.0080年代のMS開発

既存のMSの

改修、設計済み

新型MSの製造

を担当。型式番

号の数字3桁のうち

上2桁が11の

機体は、ルナツー



RGM-79G ジムコウエール



RMS-117 ガイバルディ



RX-110 ガブレイ

GUNPLA Generation

ガンプラ ジェネレーション

vol.25

RGM-79 ジム

「機動戦士ガンダム」初放映時にはいわず「ヤラレメカ」的な存在に過ぎなかったジムだが、近年は地球連邦軍系重産型機の再評価が進み、ガンプラワールドでもすっかり欠かせない存在となった。

「……でも何だかガンダムと違う」量産型

ガンプラのシリーズ化スタート時、最初にそこに飛び付いたのは主に大学生だった。彼らにとって最も重要なアイテムはジオン軍の量産型機ザクであったわけだが、その後ガンプラが社会現象的なブームに発展した際にそのコアを支えた小中学生的には地球連邦軍の機体のほうが人気が高く、とくにガンダムタイプの量産型機であるジムは低年齢層にとってなかなかの花形機であった。

まず最初に製品化された1981年4月発売の1/144スケールキット（価格324円）は非常にプロポーションに優れていたが、左手がシールドを保持しっぱなしの仕様だったのが唯一の欠点。そして、劇場映画三部作終了後にスタートした「機動戦士ガンダム モビルスーツバリエーション（MSV）」シリーズに組み込まれたジム・スナイパーカスタム（1983年12月発売 価格432円）は、低年齢層のガンプラファンからすればまもなく「待つていました！」的な機体。ヒーロー性が強く、重厚かつ待てました！に溢れたスタイルは高い人気を博した。ディテールの注目点は、付属のビーム・ライフルがショートバレル状態でも再現できることだ。

1/144 ガンダムがかなりの売上げだったため、それはほぼ無難したジムもやはり再作キットと化した。



1/144 ジム・スナイパーカスタムは、フルアーマーガンダムにも似たパワーアップ機スタイルを有する。

どのキットフォームも「個性派揃い」
自分の好みにより仕様が選べる高自由度

ジムのリメイク化は、1999年2月発売の1/100 マスターグレードモデル＝MGからスタートした（価格2,700円）。可動領域を確保するためにスカート部を中心に大規模なデザインアレンジが施され、結果、非常に精悍なプロポーションを有するキットと化した。ディテール面で特筆すべきはバックパックで、新規設定によるサーベル2本出しタイプが付属したり、ハイパー・バズーカをラックに装着させるためのアタッチメントユニットを装備することも可能となった。さらに、胴体内部に装備されるコクピットユニットが再現されていたのも興味深い。

1/100 MGは、まるでプロモデラーによるデザインアレンジ作例のようなディテールを有するのが特徴。

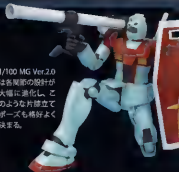


次に製品化されたのは、1/144 ハイグレードユニバーサルセンチュリー＝HGUC（2001年4月発売 / 価格756円）。こちらはMGとはほぼ同世代で、アニメ劇中に登場したスタイルをなるべく再現。それでいながら可能な限り可動領域を確保しており、腰部にローラー&左右傾斜機能を加えたあたりに設計の妙が伺える。また、シールドはランドセルにマウントさせることも可能となっている。

その後三度目のリメイク化となったのは、1/100 MGのVer.2.0だ（2009年



アニメ劇中のディテールを尊重しつつ、可動に配慮をかけた1/144 HGUCは安定感溢れる仕上がり。



1/100 MG Ver.2.0は各関節の設計が大幅に進化し、このような片膝立てポーズも格好よく決まる。

2月発売 / 価格3,780円）。こちらは初代のMGと設計コンセプトが相当に異なっており、ガンプラ独自のデザインアレンジはほとんど施されておらず、1/144のHGUCを1/100のMGへバージョンアップさせた仕様となっている。ただし腰部プロトアーマーは初代MGと同様のセンターブロックありタイプと左右二分割タイプが選択できるなど、そのあたりのデザインの使い分けにサービスマン精神がうかがえる。設計はこの時期のMG特有の「内部フレームに外装パーツを装着していく」というスタイルだが、たとえば肩関節は立体的な関節軸を装甲内部に設けて外部装甲を分割することなく引き出し&回転が可能となっていたり、足裏を3ブロック構成とすることにより片膝立ちポーズ時に足甲部分がつま先内部に入り込むことで高い設置性を実現するなど、HGUCの上位互換的な工夫が成されている。

最後に紹介するのは、MSVシリーズの1/100 MG ジム・スナイパーカスタム（2017年11月発売 / 価格4,320円）。この製品にはMG Ver.2.0の設計思想がバージョンアップされ引き継がれており、肩関節の引き出し&回転可動軸、足裏の3ブロック構成等に加え、R4型ビーム・ライフルのスコップを抜き込めるよう前腕部は取り付け基部が可動する傑作キットと化した。

ディテールの密度感と可動のバランスが見事両立した1/100 MG ジム・スナイパーカスタムは傑作。



NEXT MS

次号予告

ISSUE
26

お知らせ

諸般の事情により、ガンダム・モビルスーツ・バイブルは、しばらくの間、隔週刊での発売にさせていただきます。次号、第26号の発売は9月17日(火)です。

ヤクト・ドーガ

ギラ・ドーガの発展型にあたるニュータイプ専用機。

本来はシャアの乗機として設計されたのだが、要求性能を満たせず、試作機の製作で留まった。

お買い忘れなく安心！発売日をメールでお知らせします！

発売日お知らせメール

<https://deagostini.jp/eshirase/gms/>

- 対戦 - ガート
敵艦からの攻撃
- MS 機体解説
機体解説 / 武装解説
- 機体MSラッシュアップ
ヤクト・ドーガと関連機体
- MS / イロウト
ギニュー・ガスと周辺人物
- MS 機体
ヤクト・ドーガ 戦闘の記録
- MS 進化図
ヤクト・ドーガ 開発系図

- メカ / フ・ザール
試作機と関連機
姿勢制御バーニア
- ガンダム・バスター
2種類の同型機の装備と
機能を振り返る！

第26号

9月17日(火) 発売

定価：本体639円＋税

※地域によっては発売日が異なる場合があります
※マガジンの内容が変更となる場合があります

ネオ・ジオンが試作したニュータイプ用試作機の能力を検証!!

ガンダムMSバイブル
専用マガジンケース
好評発売中!!

キャンペーン
期間特別価格

699円

(1冊 6%込み)

特価期間：2019年9月末まで

整理に便利な
ステッカー付き!

定期購読とあわせてのご注文で送料無料!

※マガジンケース1冊に送料約10円分を収納できます。

※何冊でもご購入いただけます。※発売日は変更になる可能性があります。

好評
発売中

バック
ナンバー
ご案内



※第1号～第19号好評発売中。全国の書店でお買い求めください

豊富なビジュアルと資料によって 毎号1機のMSを多角的に解説!

GUNDAM

MS

Mobile
Suit

THE OFFICIAL

Bible

ガンダム・モビルスーツ・バイブル

GM ジム



25

2019.9.17 9.24合併号

ジム

GM

RGM-79

Total Height : 18.0m
Weight : 41.2t
Total Weight : 58.8t
Material : Titanium Alloy
Generator Output : 1,250kW
Thrusters Total Propulsion : 51,740kg



地球連邦軍系MSの一大潮流を築き上げた主力量産機



DeAGOSTINI

RGM-79 GM

4910345340999
00639